

校区に伝わる昔話

竜ヶ池公園の竜神の鱗

このあたりは石ころがごろごろした原っぱで、村人が耕して、田んぼや畑にしました。

昔、何年も水飢饉が続きました。村人は、池に守り神さまがないからだと考え、「わしらの村のため池にも守り神さまをください」と願いました。交代で何晩も祈り続けると、ある日の朝、霞がかかる春の空に、虹がかかり、その上から神さまが降りてきました。



「どうか神さま、この村の池に守り神さまをお授けください」

「叶えよう。もうじき雨期が来るので、そのときに天から白い竜をつかわす。竜は、この池の守り神となって、水が枯れることがないように見守ってくれるであろう」



雨期になって、雷鳴と同時に大雨が降り、黒い雲の間から現れた
白い竜に村人は歓喜の声をあげました。

「守り神さまありがとう」

水田は潤い、豊かな土地になりました。



でも、その後、ため池は埋め立てられ、竜ヶ池公園になりました。

村人は、願いを聞き届けてくれた神さまがさみしがらんように、桜の木を植えました。

毎年、舞い散る桜の花びらは、白い竜の鱗だと言われています。



現在の公園

小松神社のきつね

このあたりは、なにもない原っぱでしたが、いつしか田んぼや畑ができ、「小松新田」と呼ばれるようになりました。

土地の守り神さまとして、小松神社が作られ、毎年秋に豊作を祈って、祭りが開かれるようになりました。そのときは人間も狐も仲よく酒を飲み、歌を歌い、踊りました。

日も暮れて、お祭りもお開き。村人が家路につくと、土産の中身がお稲荷からどんぐりに変わっていました。



現在の小松神社



